

歴史

室町文化を地域と 現在とのつながりから考える 学習指導の展開例

鹿児島県 鹿児島市立西紫原中学校 教諭 坂口 洋幸

1 はじめに

中学校の歴史の教科書で扱われている文化は、その時代の政治的・経済的に中心となった地域や人々によって生み出された特色やその内容について述べられている。そのため、政治や経済、社会の動きと文化を関連づけることで、時代の特色を多面的にとらえることができる。

一方で現場の授業では、単元構成の中で、政治や経済、社会の変化と文化を分けて授業を構成している場合も考えられる。そうすると生徒は、作品名やその作者といった具体の文化の内容を時代の特色と切り離してとらえて覚えることになり、時代の特色と関連づけて理解することが難しいのではないだろうか。そのような考えから、本校1年生の生徒を対象に歴史的分野の学習についてのアンケート調査を行った。結果(図1)から生徒は、歴史上の人物や社会の様子についての学習には興味を持ちやすい一方で、政治・経済のしくみや文化の学習には興味

を持ちにくい傾向にあることがうかがえる。

また、アンケートの記述からは、歴史上の人物や作品を「覚える」という意識が高くなり、興味を持ちにくいという意見が見られた。一方で、「比較が楽しい」、地域の歴史に「興味を持つ」等の意見も見られ、時代を比べて文化の特色の変化や地域と現在とのつながりを踏まえた授業を行うことで、生徒の興味を高めることができるのではないだろうかと考える。

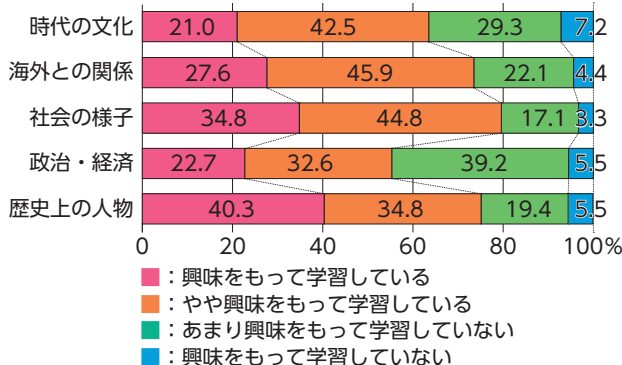
本稿では室町文化と鎌倉文化の比較とともに、当時の政治・経済、社会の変化と関連づけることにより、「各時代の特色を踏まえて理解する」という学習指導要領のねらいを達成したり、身近な地域の史跡などを教科書の内容とつなぐことで生徒が現在とのつながりを意識したりすることができるような指導計画を提案したい。

2 学習指導要領上の位置づけと指導計画作成の方法

これまで同様、現行の学習指導要領においても、歴史的分野の目標の(2)で、「伝統と文化の

【質問1】 歴史の学習をする上で、次のどの分野の学習に興味を持って取り組みますか。

【対象：1年生181人回答 令和5年2月調査】



【質問2】 文化について学習するとき、おもしろいと感じることや、理解が難しく感じることを自由に書いてください。【以下、生徒の記入例】

- ・昔の文化には興味はあるが、文化の人物の名前や作品名など覚えることが多くて難しい。
- ・現在の私たちの生活には関係ないのではと思い、興味を持ちにくい。
- ・昔と今の文化を比べて、違うところ、似ているところを見つけるのがおもしろい。
- ・文化は昔からあるもので、時代によって特徴や考えかたの違いがあり、その比較が楽しい。
- ・知っている歴史上の人物や鹿児島に関する歴史を学習するときに興味を持つ。
- ・その時代の文化や流行と現代との関連性等現代と比べたり、つながりを知ったりすることはとても楽しいし、興味深い。

図1 歴史学習についての生徒アンケートの結果

特色」などを考察すること、目標の(3)で「国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとする大切さについての自覚などを深め」ることが示されている。また、内容の取扱いについて、「時代の文化の中に現在に結び付くものが見られることに気付かせるようにすること」とあることから、時代の特色を踏まえた文化と、現在とのつながりについての理解は重要である。

筆者は、時代をとらえる単元構成として、原田智仁氏の「認識枠組型大観」の理論を応用して、時代の転換点において視点を設定して前後の時代を比較することで、時代の変化や特色を考察し説明する実践を行った（参考文献参照）。この実践は、通史の学習に加え、時代の特色の視点をもとに整理・比較することで、時代の変化を構造的に理解することを目指した。

今回はこの実践を参考にしつつ、室町時代と鎌倉時代との文化の比較や、室町時代の政治・経済や社会の特色についての既習知識をもとに、室町文化の背景との関連と、京都の文化の地方への波及について注目させたい。

応仁の乱を契機として、地域が自立性を強めるにつれて、地方の所領からの収入が途絶えて困窮する京都の公家や僧侶の中には、戦乱で荒廃する京都を離れ、繁栄する地方都市へ下る者も多かった。また、守護大名による支配が進んだことなどからも、室町時代以降、京都の文化が地方に伝わり、「小京都」と呼ばれる地域が生まれるようになった。それはその後も日本の文化、あるいは地域の共同体の文化として受け継がれ、現在の生活様式の一部に取り入れられていると考えられている。

そこで、室町文化の学習課題として「京都で生まれた室町文化はどのような特色が見られ、それが地方に広まり、現在の生活様式につながっているのはなぜだろうか」という問いを立て、室町時代に京都で生まれた文化が地方や庶民の間に広まり、今も受け継がれることで歴史が現在につながっていることをとらえさせたい。

また、「これからも受け継ぎたい文化や生活様式は何か」と問うことで、生徒みずからも文化を受け継ぐ担い手であることを意識させ、生徒が地域に残る伝統の意義や役割について考え、未来の文化の創り手として、自分たちにできることを構想する姿を目指したい。

3 指導計画と授業の展開

(1) 指導計画の作成

「京都で生まれた室町文化はどのような特色が見られ、それが地方に広まり、現在の生活様式につながっているのはなぜだろうか」を単元を貫く問いとし、2時間構成とする。

表 授業計画

時	内容
1	北山文化と東山文化（教科書*p.89～90） ・鎌倉文化と比べた室町文化の特色をまとめ、それがどのような政治や経済、社会の動きと関連しているか考察する。
2	現在につながる生活様式（教科書p.91） ・地域素材をもとに京都で生まれた室町文化が地方に広まり、現在の生活様式につながっている理由や背景を考察する。

(2) 第1時の授業計画

第1時の目標は、室町文化の特色をとらえ、その背景となっている政治や経済、社会の動きと関連づけて考察し説明することである。

○第1時の主な学習活動

過程	主な学習活動
導入	1 教科書p.88の金閣と銀閣の写真を比べ、特徴を見つけて発表する。 2 本時の学習課題を設定する。 【学習課題】 室町文化は鎌倉文化と比べてどのような特色が見られ、その違いはどのような政治や社会の動きから生まれたのだろうか。 ※2時間の評価基準（ルーブリック）を配布し、説明する。
	3 教科書を参考に、室町文化の担い手や作品を、Xチャートの4つの視点に基づいてまとめる。 4 鎌倉時代と比べた室町時代の特色を考察し説明する。
展開	室町文化は、幕府の置かれた京都を中心に、公家と武士が担い手となってそれらの文化が混ざりあい、鎌倉文化と比べて華やかさと素朴さを特色に持つ。また、年中行事など現在の文化や生活につながるものもみられる。

* 『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書）

まとめ
5 その特色は、どのような社会の変化によってもたらされたのかを話し合い、自分の考えを説明する。
6 本時の振り返りを行う

導入では、金閣と銀閣の比較をすることで、室町文化の大まかな特色をつかませたい。教科書p.88には、金閣・銀閣の写真とともに建物の構造も示されており（図2）、複合的な室町文化の特色を理解させたい。

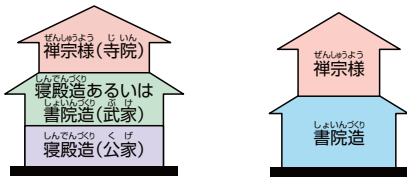


図2 『社会科 中学生の歴史』 p.88
左：「2金閣の構造」、右：「4銀閣の構造」

次に図3のような思考ツール「Xチャート」を使って、室町文化の担い手や作品を調べて分類していく。この思考ツールを使う目的は、区切られた4つの領域ごとに視点を設定することで、一つの事象を多面的にとらえることを促すことである。教科書の記述内容を参考にして、4つの視点を、文化の「中心地」「担い手」「建築・芸術」「文学・芸能、民衆」とする。

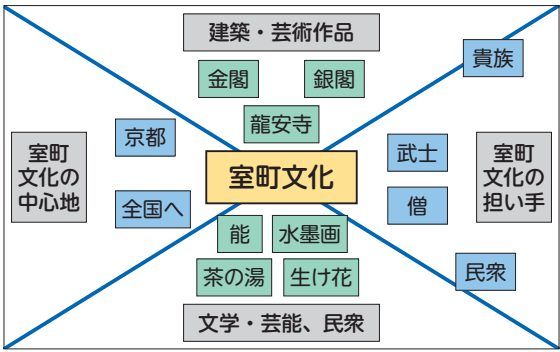


図3 室町文化の内容をまとめるXチャート

このほか、タブレット端末の授業支援アプリの機能を使って、協働的に学習を進めることが効果的であると考えられる。鎌倉文化のXチャートを事前に提示しておき、それを参考に室町文化について調べることも可能である。

分類した2枚のXチャートを比べたり、教科書p.66～69とp.88～91を比べたりしながら、室町時代の文化の特色や変化について考えさせる。教科書p.66とp.88にはそれぞれの文化を

代表する作品が印象的に配置されており、文化の特色の変化をとらえやすくなっている。文化の具体的な違いにとどまらず、それをもたらした社会の変化について、時代の特色を俯瞰的にとらえた記述が見られれば、本時のねらいは十分達成できたと推察できる。

(3) 第2時の授業計画

第2時の目標は、京都で生まれた室町文化がどのようにして地方に伝わり、現在の生活様式につながっているかを考察することである。

○第2時の主な学習活動

過程	主な学習活動
導入	1 鹿児島県南九州市知覧町の庭園の写真と、各地の「小京都」と呼ばれる場所を提示する。 ・書院造の写真（教科書p.88図5：東求堂同仁齋）から、現在の和室に取り入れられているものを探す。 2 本時の学習課題を設定する。 【学習課題】 京都で生まれた室町文化はどのようにして地方に伝わり、現在の生活様式につながっているのだろうか。
展開	3 桂庵玄樹について、年譜の資料を参考に地図帳を使って足跡をたどる。 4 桂庵玄樹が鹿児島に来て、学問を広めた背景や理由について考える。 ※当時の社会や政治の情勢と関連づけて考え、発表する。 桂庵玄樹は明に渡って朱子学を学んだが、帰国後の京都は応仁の乱の中で混乱していたため、大名の招きに応じて地方に赴いて学問を広め、鹿児島に迎えられた。 5 書院造や庶民に伝わった文化が現在にも残っている理由を考える。
まとめ	6 鹿児島市に残っている伝統行事について調べ、これからも受け継ぎたい文化とは何かを考え、自分たちができることを発表する。

教科書p.90¹¹は、室町時代に文化が栄えた主な都市が示されている（図4）。この図を参考に、筆者が勤務している鹿児島と室町時代の文化のつながりについて探してみたい。

鹿児島市には国指定の史跡になっている桂庵玄樹の墓がある（写真1）。桂庵玄樹は1427（応永34）年に山口に生まれ、1435（永享7）年に京都の南禅寺に入り修行を重ね、1467（応仁元）年から6年間明に留学し、朱子学を学んだ。しかし帰国後の京都は、応仁の乱で混乱している状況であった。他方、朱子学は戦国大名たち



図4 『社会科 中学生の歴史』 p.90 「文化が栄えた都市」



写真1 国指定史跡 桂庵墓 (筆者撮影)

にとって必要な学問だと認識され始めるようになると、桂庵は九州を巡歴して肥後の菊池氏や薩摩の島津氏に招かれて講義し、のちに薩南学派を開いた。また、「薩摩の小京都」とよばれる鹿児島県南九州市知覧には江戸時代の武家屋敷群とともにつくられた庭園があり、当時の京都の庭師による作庭と伝えられている (写真2)。



写真2 南九州市の国指定名勝 知覧籠庭園 (筆者撮影)

全国各地には室町時代の文化と関連する史跡が残り、祭りなども伝承されていると考えられる。地域素材の教材化を図ることで、生徒は歴史が身近な地域の現在とつながっていることを

より実感できるのではないだろうか。

4 授業の評価基準

本授業では、2時間ともにまとめを文章で書くことを想定していることから、事前に評価基準 (ルーブリック) を設定しておくことが求められる。本時では、思考・判断・表現の評価基準について、以下の3段階を設定した。

段階	評価基準 (思考・判断・表現)
十分満足できる	室町時代の文化の特色の変化を4つの視点に基づいて説明し、みずからが文化の担い手としてできることを考え表現している。
おおむね満足できる	鎌倉時代と比べた室町文化の特色の変化について、4つの視点に基づいて説明している。
努力を要する	室町時代の文化の作品や人物について述べている。

5 おわりに

室町時代に地方に広まった京都の文化は、地域の自治的な組織の共有体験として今も受け継がれている。伝統文化の継承が難しくなりつつある現在、生徒自身が文化の意味や伝統の役割を理解し、それを受け継ぐ人材となり得ると感じ、何ができるかを考えることが未来を担うための資質・能力の一つではないかと考える。

各学校では限られた授業時数の中で単元を計画していることと思う。今回紹介させていただいた提案の中から、一部でも活用していただくと幸いである。

〈参考文献〉

- ・原田智仁 (2013) 「歴史を大観する学習の単元構成論—日本と英国の事例分析を手がかりにして—」 (全国社会科教育学会『社会科研究』第78号) p.1-12
- ・坂口洋幸 (2022) 「時代の変化の捉え方が分かるパフォーマンス評価の開発と実践に関する研究—時代の構造的な理解を促すルーブリックの活用を通して—」 (日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.145) p.30-43

帝国書院のウェブサイトに、本授業研究のワークシートを掲載いたします。